

# 『食育と防災はつながってる！』

～実のある伝え方と実践活動～

柴田 真佑先生



「食育」活動と「防災」活動…この両者には共通する事柄がたくさんあります。例えば、どちらも活動の大きな目標は、いのちを「守り、育み、つなぐ」ことであり、また、どちらも実践活動を通じて「生きるための備え」を身につけることが求められるなど、両者の親和性は極めて高いのです。食育と防災の重要性に気づいてもらい、日々の暮らしの中での実践へと導くために、私は講演等で「合わせ技」を用いて伝えています。互いの結びつきに触れながら話しを進めることで、意外な接点に「へえ～」と関心が向くとともに、両者の手軽で身近な実例を示すことで「やってみようかな～」という自主的な行動変容を導き出すこともできるのです。

言葉も使い方しだい。受け取る側の心に届くメッセージの出し方が必ずあります。例えば、災害時を想定して学校等で行う避難訓練について「逃げるためのもの」と捉えることが多いと思いますが、私は「生きるためのもの」との視点から「避難訓練は死なん訓練」と伝えることで「いのちを

左右する取組」というイメージを根付かせることにしています。今回は、そうした言葉の言い回しをはじめとする伝え方や実践活動へと結びつく実例についてお話しさせていただきます。

#### ◆柴田真佑プロフィール

1. 氏名…柴田真佑 (シバタ シンスケ)

[大分県佐伯市(旧南海部郡弥生町)出身・在住]

[昭和42年(1967年)11月3日・文化の日生まれ〔さそり座〕]

2. 現職…ボランティアグループ「暮らしつなぎ隊」代表

コミュニティ食堂「志縁や」代表

佐伯市防災士会弥生支部 支部長

3. 専門分野…食育、食のまちづくり、いのちの話し、口腔ケア、免疫力を高める習慣づくり、子どもが作る「弁当の日」、防災、被災地支援、人権、人材育成、市民協働、新型コロナウイルス予防、鼻呼吸を促進する「あいうべ体操」等

4. 略歴

1967年(昭和42年)11月3日生。大分県佐伯市出身・在住。中学校をなんとか卒業後、地元の高校へ進学するも、悪行の限りを尽くし、長らく謹慎生活が続く。同級生や教職員からは「進級や卒業は絶対に無理!」と言われ続けたが、奇跡的に卒業。その後、電気製品や乗用車の製造工場での期間工員や、船上作業員として海上生活を送るなど職を転々としながら食いつなぐ。平成4年、京都で競馬漬けの日々を送る中、郷里の母親から電話で泣かれ、仕方なく地元就職に向けて猛勉強を開始。学生時代にまったく勉強をしなかったせいか、脳容量が有り余っていたらしく、参考書や例題に取り組むことが楽しくて楽しくて、内容がサクサク身についていく感覚を味わう。その結果、公務員試験にも合格し、平成5年に弥生町役場へ奉職。地方公務員生活が始まった。

児童福祉係を皮切りに、広報、観光、商工、企画、地域振興、まちづくり等のセクションで勤務。平成17年の市町村合併により、佐伯市職員となって以降、人づくりと地域づくりに欠かせない「食育」の重要性に触れ、一念発起。公私を問わず研さんを積み、休日にも全国各地の研修会等に出向き、食育に関して学びを深めた。全国的にも珍しい「食のまちづくり条例」や「食育推進会議条例」、「オーガニック憲章」の制定作業等を行う傍ら、防災活動も実施。東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨などの被災地で救援作業に取り組み、現在も継続して活動中。「生きるための備え」を身につける食育と防災には、「命を懸ける価値がある」と本気で思っている。

2020年3月末をもって佐伯市役所を早期退職し、フリーランスに。現在、食育や被災地支援事業を手掛けるボランティアグループ「暮らしつなぎ隊」やコミュニティ食堂「志縁や」の代表として活動中。好きな言葉は、「いただきます」「おかわり」「ごちそうさま」。その中でも特に「おかわり」が大好き。もちろん好き嫌いは一切なし。今日もモリモリ食べて、生きている。